



2015年7月24日

ラ米を悩ませる資源価格の低迷

公益財団法人 国際通貨研究所
経済調査部 上席研究員 森川 央

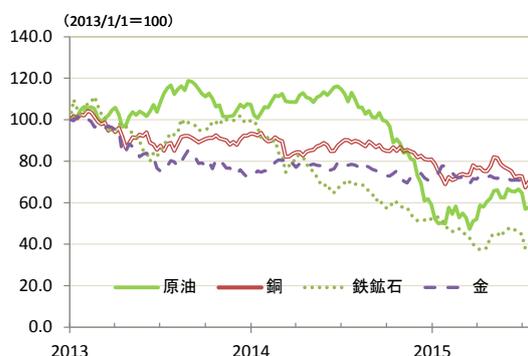
中国経済の減速が、資源需要の減退を招き、ラ米諸国の景気悪化が深刻化してきた。原油（WTI）価格は再び50ドルを割り、1年で半値になった。銅価格は1トン当たり5,000ドル近辺とこの1年間で2割強下落した。鉄鉱石も1年で半値近くになっている（-44%）。原油はコロンビアの、銅はチリとペルーの、鉄鉱石はブラジルのそれぞれ主力輸出品である。ペルーにとっては金価格の低下も頭痛の種だろう。

為替市場も見通しの悪化を反映している。2013年初めと比較すると、2割以上下落している。ブラジルとコロンビアの下落率は4割近くになってきている。メキシコは資源輸出国ではないが、連れ安になっているようだ。

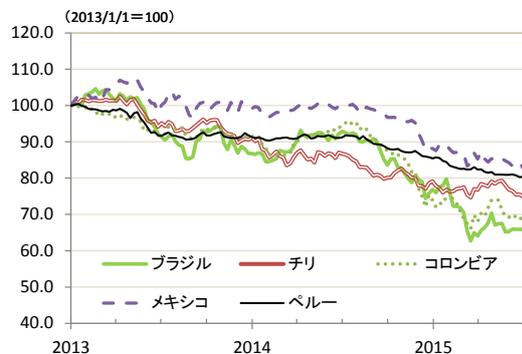
しかし、対米製品輸出が多いメキシコにとっては、通貨安は悪いことばかりではない。輸出において価格競争力の回復となるからだ。これら諸国の中で、メキシコのみ株価が堅調（2013年1月比プラス）なのも肯ける。

ラ米諸国の最近までのイメージは、低迷するメルコスール加盟国（ブラジル、アルゼンチン、ヴェネズエラ）に対し、太平洋同盟加盟国（メキシコ、チリ、コロンビア、ペルー）が地域の成長率を下支えしているという構図であった。だが、太平洋同盟諸国の中でもメキシコとそれ以外で濃淡が生まれつつある。

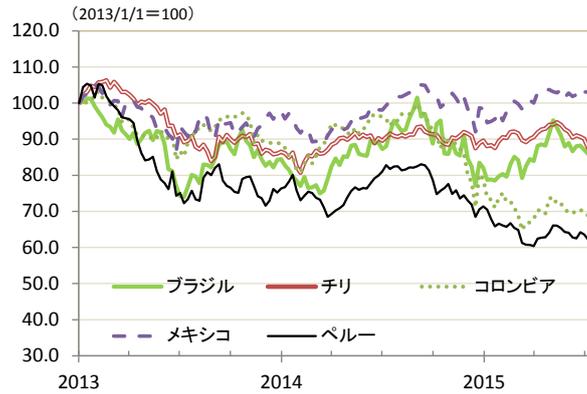
商品市況



対ドルレート



株価



当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。